# ナタナエルの信仰

## ——エキュメニカル運動における小崎道雄——

竹中正夫

はじめに
先達とその経験
性　格
一、タフなエキュメンスト
二、相互支流の使徒
三、主体的な態度
四、ナタナエルの信仰
むすびにかえて

## はじめに

天来の賜物を宿し、近代日本におけるすぐれたキリスト者の家庭に育ち、日本において、また外国において恵まれ

た教育をうけた小崎道雄は、戦前、戦後にわたって、日本の教会のすぐれた指導者の一人であった。彼は、内にあっては、信頼されたまとめ役として、外にあっては、日本の教会の代表使節として、幅ひろい働きをした。彼はその家がら、人がらを生かし、多くの友人との間がらにあって、信仰に基づいて多方面にわたる働きを淡々となし、走るべき道のりを走り、一九七三（昭和四八）年六月一八日天に召された。

その一〇周年にあたって、本稿では、主として、小崎道雄のエキュメニカル運動における働きに焦点をしぼって、論述をなし、その足跡をたどってみたいと思う。今回、一〇周年を記念して『クリスチャン・グラフ』誌[1]（一九八三年六月号）は特集を出しているが、それをみても、小崎道雄の働きが多方面にわたっていたことがうかがわれる。彼は霊南坂教会の牧師、また同幼稚園長であったが、桜美林学園、日本聾話学校、ベテスダ奉仕女母の家、デイアコニッセ協会の理事長、明治学院、梅花学園、東京キリスト教青年会、東京家庭学校等の理事を永年にわたってつとめたことは周知の通りである。また、小崎道雄の行動と思想については、同志社大学の土肥昭夫教授がすでに論述しておられるので[2]、わたしは、ここではエキュメニカル運動における小崎道雄に光をあてみたいと思う。

小崎道雄は、戦後の混乱期した時代に国内では日本キリスト教団の議長を四期（一九四六―五四年）、日本キリスト教協議会の議長を六期（一九四八―一九五九年）つとめ、国外では、アムステルダムで開かれた第一回の世界教会協議会（W・C・C・）に出席し、その中央委員に選ばれ、一九六一年まで一三年間その任にあたった。彼は、つねに温顔に笑みをたたえ、人びとの信望を得て、キリスト者の協力一致の運動に励んだ。

一九五四年、八年にわたる教団議長の任を終え、武藤健に議長を交替したとき、渡辺善太は小崎道雄の性格がいか

に当時の教団が指導者として必要としていたイメージにふさわしいものであったかを、つぎのように記している。

終戦後、占領統治下になっては、もはや教団主脳者は、ブルドック（富田満前議長のこと、筆者）ではいけなくなった。八方に笑顔を示し、神経的でなく、一見ロボット的外観を呈する、人間が必要になった。そこに神は、最適任者小崎道雄を起用なし給うた。

占領時代に於て、最も重要なことは、米軍の「わからずや」の神経を刺激してはならないということであった。その一切の出方に対して鋼鉄のような硬さを以て対したのでは、到底教団の運営はできるものではなかった。そこには、ゴムのような、時としては、再生ゴムのような柔軟性が是非とも必要であった。小崎は実に此の必要を全面的に満たすことができた。いったい彼の容貌をみて、「腹の立つ者」もいないし、況してや、「面が憎い」と感ずる者などは、余程変質者でない限り――先づ在り得まい。筆者は此の男を此の時に当って、起用なし給いし神の聖旨におどろかずには居られない。

さらに、渡辺善太は、小崎の国際的な性格が教団の対外的なエキュメニカルな働きに、重要な貢献をなしたことにふれて、こうのべている。

小崎が数次の世界教会会議その他に出向いて、日本基督教団の「名を落さなかった」ことは、一に彼の此の性格に拠ることであった。勿論附帯的に云えば、彼のプラクティカル・イングリッシュが、外国語の下手な日本人としては、先づ相当いける、ということにも関係をもったであろう。

然し此の適任者も、今や新時代の教団指導を、その後継者にゆずる時がきた。彼は「笑顔を以て」総会中終始した。我々は、彼の福相を、議長席に見ないようになったことは残念に感じたが、然し笑顔を以て新議長に対した彼を見て、非常な歓びを感じさせられた。[3]

この文章ほど、エキュメニストとしての小崎の人がらをよくえがいているものはない。終始笑みをうかべて、誠実に人に接し、円満に事を運ぶように努めた小崎の姿がよくあらわされている。彼は、エキュメニカル運動ということばをつぎのように理解していた。

①異れる教会と信徒の協力、②協力の目的のために異れる教会を一つに導く運動、③異れる教会を合同に導く運動である。この定義に従うものが教団であり、此の目的のために苦労するのが教団である。之れは、活けるキリストを信ずる事に於て可能である。今もキリストが活きて働き「これ皆一つとならん為なり」と祈り給うことを信ずるのが教団である。(4)

この定義は、エキュメニカル運動の全貌をあらわしているとはいえない。エキュメニカルとはオイクメネ（OIKUMENE）ということばをあらわし、文字通りに解すれば、「人びとが住んでいる世界」を意味している。昔は、地中海沿岸が世界であったが、今日では、全宇宙が世界となりつつある。その世界に住むキリスト者の一致を求め、さらに、世界に生息するすべてのものの一致をめざして働くのが、エキュメニカル運動である。「これみな一つとならんためなり」（ヨハネ一七ノ二一）というイエスの祈りにこたえようとする運動である。

一九八三年七月二四日から世界教会協議会の第六回大会が開かれた。そのテーマは、「イエス・キリストは、世界の生命」である。この宇宙に生息する、生きとし生けるものの根源としてイエスキリストを理解し、すべてのものの一致をめざした方向がうち出された。

小崎道雄のエキュメニカルな働きは、戦前にさかのぼる。彼は四〇歳のとき、一九二八年、エルサレムで開かれた国際宣教会議に出席し、一九三六年には、ノールウェーのオスローで開かれて世界日曜学校大会に日本代表として出席している。さらに、戦争の気配が強まってきたとき、一九四一年三月、平和使節の一員として渡米、日米の相互理解のために尽力している。

小崎が海外において充分な教育をうけたことが、エキュメニカルな性格形成に影響している。彼は、一九一二（明

治四五）年、二四歳のとき渡米して、オベリン大学で学んだのち、カーネギー平和財団奨学金を得て、コロンビア大学で国際法と社会学を学び、M・Aの学位を得、イェール大学神学部で神学を修め、B・Dの学位を得て、聖地などを巡って、一九二二年に帰国した。この間、一九二〇年、東京で開かれた第八回世界日曜学校大会に協力のため一時帰国したが、二四歳から三四歳までの成長期を一〇年にわたって海外で研鑽したことは、国際人としての資質の形成に寄与するところが少なくなかったと思われる。

## 先達としての経験

わたし自身のことを申し上げて恐縮であるが、わたしは、前後四回にわたって、エキュメニストとしての小崎道雄の働きに直接ふれた経験をもっている。

第一回は、わたしがまだ学生であったころ、一九四八年の秋だったと思うが、アムステルダム会議の報告を同志社の神学館でされたのをきいた。いまから三五年まえであるが、小崎先生がきわめて感動的にエキュメニカルな教会の一致の運動について話されたことをつい昨日のように鮮やかに記憶している。そのときの二つのことばがいまも残っており、それはエキュメニカル運動においてきわめて大切なことばである。

一つは、「イエス・キリストは神にして救い主である」というW・C・Cの基本的な信仰の表明（Basis）である。ある人は、これを「イエス・キリストは神の遣し給うた救い主」と訳しまうがえたことがあったが、小崎道雄はこれを注意深く正しく伝えていた。

もう一つは、アムステルダムのメッセージの一つは、わたしたちは「ともに留ってゆきたい」（We intend to stay

together.）ということばがあるが、それを引用して、長い分裂を経験した教会は一致にむかって除々に忍耐づよく歩むべきことを語られた。

第二番目に、エキュメニカルな会合において小崎先生と出あったのは、一九五四年六月ニューヘーブンで開かれた米国の合衆派教会の総会においてであった。かれは、教団の議長として分科会で合同教会としての教団の現状を語り、その未来についての抱負をのべていた。この分科会は、イェール神学校の講堂で開かれた。わたしは、当時イェール大学で博士論文を執筆中であったが、その会合に出席し、母校イェールを訪れて、嬉しそうに教団の話しをしている小崎の姿に親しく接した。

三番目は、エヴァンストンの会議であった。これは一九五四年の夏で、わたしは小崎道雄の推薦をうけて、公式傍聴人（Accredited Visitor）として、出席を許された。わたしにとってはじめてのW・C・Cの大会の参加であった。エヴァンストンの会議のとき、小崎道雄は、炎暑の中を、腕まくりをして、原水爆の実験ならびに使用の禁止のため尽力した。「信仰職制のことは、村田（四郎）さんに、宣教のことは、大石（繁治）さんに、ボクは、国際問題の領域で、原水爆の実験、使用反対のために頑張るよ」といって、巨体をあちこちにマメに運んで健闘した。五四年の三月には、アメリカはビキニで水爆実験をなし、その近海に出漁した第五福竜丸から多量の放射能が検出され、その後、久保山愛吉が死亡した。これをうけて、日本基督教協議会の第七回総会では、水爆実験中止の決議がなされ、日本から三万四、〇〇〇通に及ぶ反対の署名がエヴァンストンに送られ、その送料だけでも一万数千円に及んだ。[5] 日本のキリスト者の意見は、ジョン・C・スミスやヴァン・カークなどの指導者たちによって取りつがれ、エヴァンストンの決議文

にも反映されている。小崎道雄は、この点についてつぎのように報告している。

水爆の問題は、軍事上、政治上の問題であるよりは、宗教上の問題である。（中略）原子力を武力にしてはならないというのは、一億七千万の世界全信徒の声である。この声を、あるいは政治家や科学者は無視するかも知れない。しかし、神は無視したまう筈はない。（中略）

キリスト者は、平和については責任を分ち合わなければならない。また自由も正義も、愛も真理も、その実現についてはキリスト者の祈りと努力とが要請されている。(6)

エヴァンストンの大会では、小崎道雄たちによって伝えられた日本の教会の声も反映されて、「原水爆をふくむ大量破壊の核兵器の禁止、それにともない、諸国民の安全を保証するような国際的監視と抑制の条項、さらにほかのすべての軍備の徹底的縮少」などの文章が報告書におりこまれている。

つぎに、わたしが小崎先生と共にエキュメニカルな旅を共にしたのは、一九六一年、インドのニューデリーで開かれたW・C・Cの第三回の大会のときであった。このときは、小崎先生は、七三歳、ベテランの中央委員の一人として後輩を指導された。私は、三六歳であった。主題の一つである「奉仕」について講演を担当し、小崎先生は「とてもよかった」といって喜んで下さった。このときから中央委員を若い阿部志郎氏に譲り、エキュメニカルな役職からは退りぞかれた。しかし、翌年には、ソ連を訪ね、ロシア正教会との交流にあたったり、一九六四年には、北米および南米を訪問するなどエキュメニカルな旅はつづいた。

わたしは、小崎道雄が、エキュメニカルな仕事にあたりながら内外を旅した、その足跡を『基督教新報』を通してたどってみた。また、彼が当時教団議長としてなした説教や、エキュメニカルな会議に出席する前のメッセージや帰

国してからの報告などを丹念に記録してみた。それらを一覧表にしてみると、あらためて小崎道雄のエキュメニカルな働きのひろがりと、そこにかけた彼の情熱と関心の深さをあらためて感じさせられた。それらの一つ一つを吟味することは、限られた紙面では難しいので、そこに流れている彼のエキュメニストとしての性格を、つぎの四つの点からのべてみたい。

## 一　タフなエキュメニスト

第一に気のつくことは、それぞれの旅は、相当なハードスケジュールであったが、可成りの年齢にもかかわらず、よく旅を続け、熱心に会議に出席し、まめに報告文を書いていることである。彼はタフ（丈夫）なエキュメニストであった。たとえば、アムステルダムの会議のときには、七月二一日に羽田を出発、ハワイに二泊し、サンフランシスコに赴き、二八日にロスアンジェルスに着き、八月二日まで七回の話しをなし、ソートレイキとデンバーの日本人教会や米人の教会で話しをし、八月六日にシカゴに着き、日本人教会の連合の集会で話しをし、八月九日には、クリーブランドに着き、母校オベリン大学を訪れ、八月一一日にニューヨークに出て、一三日、船でアムステルダムに向い、船中でも二回、日本について話をなし、八月二一日にロッテルダムに到着、九月四日までアムステルダムの会議に出席ののち、中央委員会に残り、六日から一二日まで、ライデンで開かれた国際宣教会議の会合に出席している。その後、スイスのボセイのエキュメニカル・インスティチュートにおける会合に出席し（九月一三日―一九日）、モンテローで開かれたM・R・Aの会合にも参加している。九月二四日、ヨーロッパを船で出て、一〇月五日、ニューヨークに着き、オハイオ州コロンバスで開かれた外国伝道の会議に出席し、九日には再びニューヨークに帰り、エングル

ウッドの教会で説教をし、ランキャスター神学校を訪ね、福音改革派の大会で話しをし、シカゴを経て一六日にサンフランシスコに到着し、アムステルダムの会議の報告をなし、ハワイに一泊し、一〇月二一日、羽田に到着している。ちょうど三カ月の旅であり、この間、公けの会合で話しをしたことは三三回に及んでいる。(7)

外国に休暇で観光にゆくのとちがって、つぎからつぎえと会議に出席してゆくエキュメニカルな旅は、緊張の連続であり、可成り疲れるものである。外国の言葉で、ちがった食事をし、ベッドもたびたび変ってゆく、少し馴れたと思うと又つぎの場所に移動する、その間、洗濯や訪問、つぎの旅先きの打ち合わせなどもある。エキュメニストの体質として、「よく眠ること、よく食べると、(ただし食べすぎはいけない)そしてあまり心配しないこと」があげられている。小崎道雄はそれにふさわしい性格であった。彼は、どこでもよく眠ったし、なんでもよく食べた。そして、あまりくよくよしなかった。あるとき、彼が迷い子になった。「小崎先生が行方不明になった」と心配したことがあったが、御本人は、ニコニコと一向とんちゃくなく帰って来られた。

当時は、現在のように日本人が海外にゆくことは楽でなかった。現在では旅券は数次旅券であるが、一九六四年までは、一回ごとに旅券も申請し、外貨も許可を得なければ持ち出せなかった。飛行機もまだまだ素朴なプロペラ機が多かった。そして、小崎道雄は、当時決して若くなかった。アムステルダムのときすでに六〇歳、ニューデリーのときは、七三歳であった。

彼は決して、生来頑健な体質ではなかった。麻布中学を了えたとき、健康を害し、茅ケ崎、鹿児島を転々と療養をなし、学校も、第八高等学校、農大、明治学院と変っていったのも、みな健康のせいからであった。小崎がのちに教団の要職についたとき、彼を紹介した文章がある。

小崎氏は何等世の苦労を知らざるものの如く日日是好天日晴又晴、快食快眠、楽元様相に見えるが、氏は青年時代、実に惨憺苦難の七、八年間を悩み抜いた体験の持主である。氏が高等学校に進まんとする途上に於て、突如肺患のために囚えられ、隠忍療養、漸く起ち上らんとしては後に倒れ、ある時は湘南の病棟に横わり、時に奈良丸のレコードに慰められ、ある時は農夫の実家に通い、地下足袋を穿いて、大根を引き、同学の友は既に学士となって社会に立つに至るも、氏は只に加養これ努め、御両親も僅に一粒種の氏の生命の全からんことを祈る状態で二十五才の初夏を迎えた。[8]

その後、彼は、病気の身であったが三等の船に身を託して渡米、苦節一〇年の研鑽をつんで、一九二二年に帰国した。当時の母千代の配慮は並々ではなかったと思われる。また、彼がタフなエキュメニストとして強行軍の国際会議旅行をつづけて使命を果し得たのには、静夫人の内助の功も少なくなかったと思う。さらに、彼自身の内なる節制に負うところもあったと思う。

## 二　相互交流の使徒

エキュメニカル運動において大切なことは、国籍を異にする、ちがった教会のキリスト者たちが、互いに出あって、主にある交わりを深め、一致をめざして協力しあうことである。小崎道雄は、信仰職制について、エキュメニカルな論争をたたかわせた人ではなかった。また、エキュメニカルな大会において大むこうをうならせるような大演説をぶったりしなかった。彼は、いつもニコニコ、淡々として、エキュメニカルな交わりを深めるように努力した。教会と教会がお互いの安否を問い、互いに祈りと理解を深めてキリストに近づくために、彼はふさわしいエキュメニカルな使節であった。

小崎道雄は、エキュメニカルな旅に出る前に、教団の機関紙に出席する会議の目的をのべ、その会議のために、また自分が使命を果すことが出来るように祈って欲しいとのべている。たとえば、一九四七年五月、カナダのホイット

ビーで開かれた国際宣教会議に出席することになった。これは戦後渡航が制限され、この種の国際会議に出席する最初の例であった。彼は、出立にあたってこうのべている。

今回の私の立場は単に教団のみならず、日本の凡ての方面を代表しているものとして国際的会合に臨む破目となった。（中略）七月五日から二四日までカナダ、トロント市郊外ホイトビイに於て催される此の会議に於て、日本最初の――男子として――渡航者としての使命を完了し得る為諸君の加禱を願う。(9)

彼は祈りに支えられてエキュメニカルな会合に出席し、その祈りにこたえて働き、会議の様子を伝えるようにつとめている。

一九四八年七月、アムステルダム会議にむけて出発するにあたって、同会議の意義をのべ、その成功のために日本の教会がともに祈って欲しいとアッピールしている。

ついては、八月二二日（日）は会議の開会礼拝の行はるる日でありますから、主題『人類の無秩序と神の計画』により当日全教会もまた祈禱会をなして会議と小生任務とのため御加禱下さい。(10)

彼は、このように自分がひとりでエキュメニカルな会議に出るのではなく、自分の教会の信徒たちの祈りと共に出席し、日本の諸教会の祈りを背後にうけて参加した。だから、彼は丹念に会議の様子を静夫人に書きおくり、夫人はそれを適誼にまとめて、教団の機関紙や霊南坂教会の教報にのせるようにつとめた。こうした働きにおいて、小崎道雄は、自らをエキュメニカルな使節（Ambasedor）と考えていた。使節は、特定の使命をおびて、他の国に派遣されるもので、それを通して双方の国々が交流を深めるものであった。

そのようなエキュメニカルな教会相互の交流の促進には、小崎道雄はふさわしい人物であった。それは、彼が在米

留学の経験が長く、英語に堪能であるということに限られなかった。それは、誰とでも温容に接し、術策や野心のない淡々とした人柄が重要な役割を果していた。

一九四八年、W・C・Cの創立総会であるアムステルダム会議に出席したときも、会議中の印象として、多くのすぐれた世界の教会の指導者たちと出あったよろこびを記し、カール・バルト、クレーマー、ロマドカ、ヴァン・デューセン、ニーバー、ブルンナー、オルダム、などの名をあげたのち、バルトの印象をつぎのように記している。

その中でバルト先生について一言したい。私は同先生と第一のセクションで終始一緒にいたが、その人物をよく知ることが出来た。バルト先生は、無邪気で親切な人であって、意見のちがう人に対しては、御自分の考えを親切に語られるような人である。その長男は、アフリカに宣教師として献身しているが、バルト先生は決して恐ろしい人ではなく好々爺である。バルティアンと言はれる人たちの中には、どうかと思われる人があるが。[11]

教会と教会の交わりに架け橋の役割をすることは、海外の教会との間のみ限られていない。彼は、成立間もない日本基督教団の議長として、また、異った背景をもった諸教会のあつまりである日本基督教協議会の議長として多年にわたった交わりの形成に尽力してやまなかった。

教団議長として、小崎は請われるままに、地方の諸教会の問安に励んだ。昭和二二年一月二〇日の『教団新報』はつぎのように記している。

総会議長は、東奔西走教団の強化に寧日なき苦闘をつづけているが、右首相官邸の集会の二日後、一八日から一二月一〇日まで中国は、岡山県一帯、岡山、津山、玉野、宇野、笠岡の市町、それから九州に赴いて門司、大分、別府、延岡、宮崎、小林、熊本、長崎、福岡、それから四国に飛んで松山、今治、最後に京都に立ち寄って帰京した。

この間主要都市を中心に諸方で修養会を催して百数十名の新知旧友に面接し、教団の一致契合に努力したが、到る処同氏の略策を用いず、権柄を振らず、正直で障壁を置かない態度は、未知の教職も遠慮なく意中を打ち明けるので、相互の理解を深め融

合に資する処が頗る多大であったものの如くである。[12]

戦後間もないころであり、今日のように新幹線やジェット機のある時代ではなく、交通機関はきわめて混雑しており、約三週間にわたって地方の諸教会を問安することは仲々容易なことでなかった。わたしは、彼が教団議長をつとめていた、一九四六年から一九五四年の間を中心に、主として『教団新報』から、公務往来・消息をたどって一覧表としてみたが、実にマメに地方の諸教会を廻って世界の教会の動向を伝えると共に、教会相互の交わりの促進に身を動かせて尽力している姿がつぶさにうかがわれる。それと同時に、小崎道雄をエキュメニカルな指導者として国の内外に送り出し、彼の旅路の平安と使命の完遂のために霊南坂教会の人びとが支援をなし、祈っていたことを忘れてはならない。かつて、教団の歴史には、教団の総会議長に推されながらも、その牧する教会の賛同が得られないために、有為の士がその任にあたり得なかったこともあった。霊南坂教会の信徒たちの祈りと支持なくして、小崎のエキュメニカルな貢献はなかったことを銘記すべきであろう。

たびたびにわたる海外の公用主張にあたって、教団は殆んど費用の負担をしなかった。一九五六年七月にはじめてW・C・C中央委員会に出席するに当って、旅費のうち二〇〇ドルが教団から支出された。おそらく、それまでは国際会議の主催者が旅費を負担していたものと思われる。通常、旅費は支給されてもそれは交通運賃のみで、途中の滞在費や雑費は本人の負担となる。度かさなる海外の出張は、経費の面でも容易ならぬことであったと思われるが、それを果し得たのは、その背景には、霊南坂教会の信徒たちの理解ある支援のあったことを忘れてはならない。よきエキメニストを育るものは、よき教会の交わりであることを、あらためて教えられるものである。

## 三　主体的な態度

エキュメニカルな交流は、単なる社交的な交わりでない。世界の各地に散在する諸教会が集って、聖書の指針に耳を傾けて、この時代における共同の使命を把握するときである。そのためには、しばしば、それぞれの参加者は主体的な態度を表明することが必要となってくる。そうでないならば、エキュメニカル運動は、単なる社交的肩たたき運動となってしまう。小崎道雄は、どちらかと言えば、温厚な人がらであり、旧交をあたため、新しい知友を大切にしたエキュメニカルな交わりの人であった。しかし、ときとして、彼はゆったりとした口調で、しかしはっきり、主体的な見解を表明してはばからなかった。そうした例のいくつかをあげてみよう。

第一に挙げられるのは、さきにものべたエヴァンストン会議（一九五四年）のときの原水爆実験禁止ならびに使用反対の提案であった。この問題に打ちこんだ小崎道雄の情熱はすさまじいものがあった。小崎道雄はエヴァンストン会議の報告でつぎのようにのべている、

> さいわい、私にとっては、この教会々議参集者に知人が多く、ことにこの委員会（教会と国際問題委員会）にジョン・スミス博士の如き親しい友人が居り、また背後に日本の皆さまの祈りもあって、すべて都合よくゆき、水爆に関するわが国のうったえが、報告書の中に正式に書き留められたことは、まことに感謝すべきことである。
>
> 関係者バンカーク博士が、この訴えを討議する前に、親切に諸報道機関に内報し、宣言書や署名を責任者に手渡すところなどシカゴ・トリビューン、その他の大新聞に写真入りでニュースとせられたことなど、たいへんに有益であったわけである。
>
> （中略）
>
> 原子力を武力として使用することは、神の名を瀆すもの、ぜひこれを国際的看視と統制のもとにおかなければ、世界の平和は保たれない。(13)

主体的な発言の第二の事例として、小崎の宣教師に対する態度にみることが出来る。戦後、日本基督教団は、合同

教会としてまだその基礎が薄弱な状態にあった。一方、アメリカの教会は戦勝国の教会であり、大きな経済力を背景としており、その発言力はきわめて大きい時代であった。日本の教会は、廃虚の中にあって、米国の教会の援助を受けたいというのが風潮であった。戦後、つぎつぎと有力教派の宣教師たちが来日し、日本の教会に援助を申し出たとき、教団の議長として小崎道雄はつぎのようにいっている。

第一に、太平洋戦争によって日本の教会は三分の一を失ったが、中国、フィリッピン、ビルマは七〇%を失ったと報じられている。もし、日本に余力があれば、これらの教会復興に努力すべき責任を感じている。したがって、アメリカから日本への援助は感謝するが、日本からすすんで援助を求めることはつつしみたい。

第二に、日本の現状から宣教師はキリスト教の中心真理をアメリカニズムと明白に区別して、日本に伝道してほしい。

第三に、教団の育成に懸命に努力をしている現在、教団に同情のない宣教師は歓迎できない。教団に協力し得る人物を送ってほしい。(14)

これは、一九四七年のことであった。第三にのべた精神に基づいて、内外協力会のような組織が生れるようになったということが出来る。わたしが、とくに興味深く思ったのは、第一の点と第二の点で、これが、どの程度具体化されたかは問題であるが、こうした発言を公式の立場で表明した人の見識をうかがい知ることが出来る。

小崎の主体的態度をうかがわせる第三の例として、一九四七年一一月六日に、首相官邸において開かれた宗教界の指導者の会合における彼の発言をあげることが出来る。政府は宗教家に対し、国民の情操涵養のため貢献を期待したのに対し、小崎は真先に発言を求められ、こうのべている。

政治家や官僚が何とか言うと宗教家を招いて意見を求めたり、また、政策の実行の便宜に使われるようであるが、宗教は政治に利用すべきものでない。真に宗教の重要性に気付かれたならば、政治家自らが国民に率先して之を信奉して範を示めさるべきものと考える。(15)

国家の政治的指導者が、宗教家の協力を得て、政治を円滑にすすめようとするのは当然のことである。明治四五年の三教会同はそれを如実にあらわした出来事であった。

当時世界教会協議会は、六年ごとに大会を開いていた。第一回は一九四八年にオランダのアムステルダムで、第二回は一九五四年に北米のエヴァンストンで開かれた。第三回は、アジアのどこかで開かれる可能性があった。一九五三年インドのラクナウで中央委員会が開かれたとき、小崎道雄は、日本基督教団の平和決議文を全員に配布し、第三回世界教会協議会の大会を日本で開催するよう正式の要請文を、日本基督教協議会の名において、W・C・CのW・Aヴィサトーフト総幹事に手渡している。[16]

周知のように、W・C・Cの第三回の大会は、インドのニューデリーで開かれ、折角の招請は実現されなかったが、一九五八年には、第一四回世界キリスト教教育大会を日本に招き、日本の教会の代表者として、準備委員長をつめ、大会の成功に貢献した。この大会は、戦後わが国で開かれたキリスト教の国際会議としては、最も広汎な参加者を迎えたものであった。東南アジア、韓国、台湾を含めて、約三〇〇人のアジアの代表者たちを迎えて、その旅費、滞在費等を地元の委員会が負担することになった。その募金の目標は三〇〇〇万円であった。小崎道雄は、アジアからの代表者には、旅費、滞在費のみでなく、小遣いも負担すべきであると主張し、この募金を完遂し、アジアから見えた遠来の客に感謝された。

小崎道雄とともに募金にあたった。藤田正武牧師は、こうのべている。

この時、小崎先生は、「藤田君、日本は今度の戦争でアジア全体に対して犯した残虐な行為の謝罪は、こんなこと位ではすまないよ」とおっしゃった。[17]

淡々とした発言であった。別に肩をいからして語ることはしなかった。しかし、戦争に対する懺悔のおもいは、この人の心底から離れ得ないものであった。

## 四　ナタナエルの信仰

昭和二二年三月五日の日本基督教団常議員会でなした説教において、小崎道雄は、ナタナエルの信仰についふれている。[18]

ナタナエルは、はじめ、イエスのことをきいたとき、「ナザレからなんの善き者が出るべき」といってイエスのことに関心を示さなかった。しかし、ピリポが熱心に「来りて見よ」といったとき、それを素直にうけいれてイエスのところに来た。イエスは、ナタナエルが自分の方に来るのを見て、こういわれた。

「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心に偽りがない」（ヨハネによる福音書一ノ四七）

ナタナエルは「どうしてわたしを御存じなのですか」とたずねる。イエスは答えていわれた。

「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。

ナタナエルは、イエスの慧眼に心を打たれ、イエスに従うようになった。小崎はナタナエルの信仰についてこうのべている。

イエスは『視よ、これ真のイスラエル人なり、その裏に虚偽なし』、とナタナエルの素朴、純真に、自ら欺くことの出来ない特質、長所を認識して、これを推賞せられた。これを聴くとナタナエルは無告の志に悶えている際にこの知己の御言に接し、心から揺り動かされた。イエスの聖愛に燃える知覚は直ちに其の接する人物の特質を洞観して、その琴線を弾ぜずに置かなかった。これが、当面者を感激せしめる秘訣であった。

日本人は如何にも自負心強烈で独善的で容易に先入主を棄てず、偏見に固着する国民性を有している。然し、それだけに極めてナイイヴで、純真で、正直な特質を有している。

ナタナエルは、まだイエスを知るまえからイエスによって知られていた。彼のまなざしがイエスをみつめる前に、イエスのまなざしは、彼をとらえていた。彼の心の奥そこまでをも見ぬいたイエスの洞察にナタナエルは感銘して、率直に、そして素直に、イエスにこたえていった。

小崎道雄は、日本人をナタナエルになぞらえているが、わたしは、彼自身、ナタナエルのような信仰をもっていた人であると思う。彼は、単純であるということを、いささかも恥としなかった。彼にとっては、信仰とは、むつかしい神学的論議ではなく、素朴に自らの罪を告白し、単純に主に従うことであった。彼は人間は無智（ignorance）であってよいとは思わなかった。しかし、幼児の如く単純無欲（innocence）であることを貴しとした。

エキュメニカル運動においても、教会間の歴史的伝統や煩しい神学論議のあるなかで、彼は、「信仰の一致の問題は、決して根本信仰を妥協する意味ではなく、単純化することである」とのべている。

ナタナエルの信仰は、イエスの信頼に、素朴にこたえる信仰であった。同時にその信仰は、将来におけるイエス・キリストの福音の勝利を確信するものであった。小崎道雄は、たびたび、説教のテーマとして、「福音の勝利」とか「世に勝つ信仰」という題をかかげている。その点からいうと、彼は、将来に対して悲観したりせず、楽観的であった。落胆してつぶやくのではなく、希望をもって、明日にむかっていった。それは、人間の力やこの世の富に依存する現世的楽観主義でなく、十字架と復活にあらわれたキリストの勝利に基づく、福音的楽観主義であった。

## むすびにかえて——根明(ねあか)の人

おわりに、小崎道雄が、昭和二八年四月四日の『基督教新報』にのべている論説を引用して結びとしたい。彼のこの論説は、復活節にあたって記されたもので、復活の信仰がわれわれに勝利の希望を与えるものであることをのべている。

> 我等は、個人としても、教会としても、最後の勝利をキリストにおいて保証されているのである。これを『基督教的楽観主義』という。世のいわゆる楽観論ではない。此の世的には悲観論であっても、信仰的には楽観論である。わたしは、信徒として常に反省し恐れつつ救いの道に励むことの重要性を認むるが、それは根底にキリストにおいて勝利と永遠の生命を与えられる信仰がある所に意義のあることを忘れてはならぬ。[19]

わたしたちのこの世における旅路においては、苦難の日々が多い。失敗をすることもあり、思いもかけない不幸にあうこともある。国家や組織の桎梏にあって、個人ではどうすることも出来ない無力感をかこつこともある。それのみならず、自らの愚かさの故にモタモタしたり、わかりつつも誘惑におちいったりすることさえある。その旅路のさなかで、キリスト者は希望をもって生きる。それは、死して甦ったキリストと共に生きる信仰の旅路であり、それは究極的には勝利の人生である。小崎道雄はそのような旅路を、つねにほほえみながら歩んだ旅人であった。

現代的な表現をするならば、彼は、「根暗(ねくら)の人」ではなくて、「根明(ねあか)の人」であったと思う。信仰によって根を明るく、明るい人であった。それは空元気の明るさではなく、人間の愚かさは十字架と共に死し、キリストの復活と共に生かされていることをうけいれるもののもつ明るさであった。

(1) 『クリスチャン・グラフ』（一九八三年六月号）「特集小崎道雄先生永眠一〇周年記念」。
(2) 土肥昭夫「小崎道雄の行動とその論理」（霊南坂教会、一九七二年一〇月）。
(3) 渡辺善太「富田と小崎と武藤」（『基督教新報』二九二二号、昭和二九年一一月六日）。
(4) 小崎道雄「活けるキリスト」（『基督教新報』第二八四一号、一九五三年四月四日）。
(5) 「世界教会会議でわれわれは何をしたか」（『基督教新報』二九一九号、一九五四年一〇月一七日）。
(6) 前掲書。
(7) 『日本基督教団新報』二六三三号（昭和二三年一一月一日）。
(9) 『日本基督教団新報』二五八四号（昭和二二年六月一日）。
(10) 「総会議長挨拶」（『日本基督教団新報』二〇二五号、昭和二三年八月一〇日）。
(11) 「アムステルダム世界教会会議報告」（『日本基督教団教新報』二六三三号、昭和二三年一一月一日）。
(12) 『日本基督教団新報』二五七一号（昭和二二年一月二〇日）。
(13) 「世界教会会議でかれらは何をしたか」（『基督教新報』二九一九号、一九五四年一〇月一六日）。
(14) 『東京教区』一三七ページ、土肥昭夫『小崎道雄の行動とその論理』四九ページ。
(15) 『日本基督教団新報』二五七一号（昭和二二年一月二〇日）。
(16) 『基督教新報』二八三二号（昭和二八年一月三一日）。
(17) 藤田正武「小崎道雄博士とその国際性」（『クリスチャン・グラフ』一九八三年六月号、一三ページ）。
(18) 『日本基督教団新報』二五七七号（昭和二二年三月二〇日）。
(19) 小崎道雄「活けるキリスト」（『基督教新報』二八四一号、一九五三年四月四日）。

# 小崎道雄　公務往来　消息

（1946〜1962）

| 年月日 | 雑誌名 | 号数 | 公務往来　消息 |
|---|---|---|---|
| 1946. 6.20<br>（S21） | 教団新報 | 2550 | 教団主管者として教育者審査中央委員を命ぜらる。 |
| 8. 1<br>10 | 教団新報<br>教団新報 | (2554<br>2555 | 9月発大阪へ13日帰京，26，27日両日<br>更に兵庫教区教師修養会へ出張。 |
| 8.20 | 教団新報 | 2556 | 去る25日夜出発，兵庫県勤労会館山の家に於て開かれる兵庫教区教師修養会に出張，18日帰京。 |
| 9.20 | 教団新報 | 2559 | 9月中旬京都に赴き21日帰京。 |
| 11.10 | 教団新報 | 2564 | 去る6日発，東北へ赴き，10日福島教会の鐘の還附式に列し11日帰京。 |
| 1947. 1. 10<br>（S22） | 教団新報 | (2569<br>2570 | 本教団総会議長として去る16日内閣首相官邸に催された「国民宗教情操涵養」其の他の問題の管長，主管者，会議に出席。 |
| 2.10 | 教団新報 | 2573 | 全国農村伝道協議会顧問に選ばれる。 |
| 3. 1 | 教団新報 | 2575 | 去る25日鶴見の曹洞宗総本山総持寺に招聘せられ伝道の精神，態度，目標に就き講演。<br>3月2，3日両日名古屋に於け，中部教区の連合礼拝，大伝道会，修養会に於て講演。 |
| 4.10 | 教団新報 | 2579 | 5月初旬開催の宗教平和会議，事務所主催の「平和と宗教」を題とした論文及び標語懸賞の |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 審査員となる。 |
| 4.20 | 教団新報 | 2580 | 丸ノ内の青年会社員等が組織して，丸ビル前面広場で毎日正午，野天講演会を催している青年文化聯盟の招きで去る28日正午「新憲法と基督教」と題して講演。200余名傾聴者が集った。 |
| 5.20 | 教団新報 | 2583 | 去る23日出発。国際宣教会議の為カナダへ。 |
| 1947.6.1<br>(S22) | 教団新報 | 2584 | 去る9日内閣に於ける都道府県宗務課長会議に於て講演。各学校の宗教々育方策と宗務課長自身の宗教信奉の必要を強調。 |
| 6.20 | 教団新報 | 2586 | 去る1日軽井沢教会にて朝拝説教，会衆約100名の由。なお3日は埼玉県越ケ谷にて開催の関東教区総会にて講演。 |
| 7.1 | 教団新報 | 2587 | カナダ渡航は都合により中止，なお12日東京赤坂警察署員100名に講演。 |
| 7.10 | 教団新報 | 2588 | 6月27日午後2時新政府の新日本建設精神運動協議会に出席。 |
| (8.10<br>(8.20 | 教団新報 | (2591<br>(2592 | 23日午前9時よりの首相官邸における新日本建設国民運動の宗教家協議会に出席。其の司会に当る。 |
| 10.10 | 教団新報 | 2597 | 10月18日より25日まで西中国教区を巡回。 |
| 1948.2.1<br>(S23) | 教団新報 | 2608 | 年末12月29，30両日福岡市で開かれた北九州教区教師修養会に出席。1月2，3日両日鹿児島県加治木町，4日鹿児島市，5日八代市の諸教会応接，9日帰京。 |
| 2.20 | 教団新報 | 2610 | 去る12，13両日内外協力会議の委員会が開催され委員長に選ばれた。 |
| 5.1 | 教団新報 | 2614 | 中央農村教化研究所理事に選ばれた。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 5．1 | 教団新報 | 2616 | 内外協力会，海外留学生委員会，委員長。 |
| 5．1 | 教団新報 | 2616 | 5月10日京都教区教師修養会，11日同教区総会，何れも総会議長として出席。5月19日金沢市で開かれる北陸教区修養会，20日同教区総会に出席。 |
| 8．1 | 教団新報 | 2624 | アムステルダムに於て開かれる世界教会総会に出席のため7月21日夜半羽田空港発空路ハワイに向い，22日朝ハワイ着。24日夕までにロス・アンゼルス着，25日礼拝はその何れかの教会で説教，次いで太平洋沿岸の日本人諸教会歴訪，各教会が戦後の日本に与えた精神，物資両面の援助を感謝し，8月までに東部に赴き8月3日ニューヨーク発渡欧，8月24日より9月4日まではアムステルダムの世界大会，5日から常任委員会，終って米国に帰航米国連合諸団体の首脳部を訪れ，続いてコングリーゲーショナルの旧友を訪問10月26日の総会までに帰還の予定。 |
| 1948.11.10<br>(S23) | 教団新報 | 2634 | 去る2日内閣総理大臣より会見を申込まれ，日本の指導精神喪失を慨げき教化に努力せんことを懇請。 |
| 11.20 | 教団新報 | 2635 | 去る10，11両日越ケ谷にて開会の関東教区教師修養会に出席講演。 |
| 12．1 | 教団新報 | 2636 | 世界教会々議報告に次の如く巡講，11月2日明治学院高等学部，5日横須賀衣笠病院，7日(日)2時東京教区信徒会，4時ユニオン，チャアチ，7時，玉川平安教会，8日東京教区教師会，10日関東教区教師会（越ケ谷教会にて）11日東京教区婦人会々長会，12日神奈川教区婦人大会(紅葉坂教会)，13日基督教青年会，尚，19日には京橋公会堂，23日京都，24日大阪，25日神戸，26日姫路，28日倉敷の各教区報告会にて講話の予定。 |
| 1949．1．10<br>(S24) | 教団新報 | 2640 | 去る20日午前11時，天皇陛下に招かれ世界教会協議会について報告，続いて種々御質問にお答えした。<br>なお，上越キリスト運動の為13日，原市教会，婦人会ならびに一般講演，14日は安中教会新島学園，婦人会，一般講演。15日群馬支教区教師会，桐生市教会連合，16日前橋共愛女学校， |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 前橋教会一般講演の為出張。 |
| 2.10 | 教団新報 | 2643 | アムステルダム会議の報告ならびに伝道応援のため1月中旬以降関東教区間を巡問。<br>竜ケ崎24日，土浦25日，水戸勝田26日，水海道27日，佐野28日，栃木29日，宇都宮鹿沼30日。<br>なお31日夜東京発近畿方面に出張。 |
| 3.10 | 教団新報 | 2646 | 24日午前聖学院高等部，3月6日夕五日市光ケ丘教会講演，東北教区の巡回日程は次の予定。<br>25日若松，26日郡山，27日福島，28日米沢，29日山形，30日酒田，4月1日仙台。 |
| 5.10 | 基督報新報 | 2652 | 国際キリスト教大学設立委員に選ばれる。 |
| 6.1 | 基督教新報 | 2653 | 5月23日，横浜より出帆。<br>主なる日程，6月13日オベリン大学卒業式に於て同大学より神学博士D.D.の称号を贈られその授与式に出席，6月17日から24日まで北米マサチューセット州ウェスレー市に開催の全世界組合教会総会に日本基督教団代表として出席，6月26日米国出発，空路ロンドンへ，29日より7月6日までウエトハム，カーレヂの世界教会協議研究会，7月8日～15日まで英国チーチェスター市オッターカレッヂにて開催の中央委員会に出席，米国経由9月中旬帰国の予定。 |
| 9.10 | 基督教新報 | 2664 | 9月10日プレジデント，ウイルソン号にて帰国した。 |
| 9.10 | 基督教新報 | 2664 | 10月5，6，7日に開催される全国教師大会の招待状を全国の現任の教師担任，教師教務並び隠退教師各位に対して発した。 |
| 10.20 | 基督教新報 | 2668 | 10月22日(土)同志社理事会<br>11月5日(土)名古屋市連合集会<br>11月8日(火)群馬県崎教会<br>11月20日(日)甲府市山梨英和女学校 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 11月21日(月)東京発，一週間四国教区，ならびに広島市諸教会応援。<br>12月初旬帰京。 |
| 1950. 2.18<br>(S25) | 基督教新報 | 2681 | 2月8日午後1時より「ラスキン誕生日の集い」に於て「戦後の欧米と日本」と題し朝日新聞社講堂にて講演。<br>3月7日から9日徳島県鳴島に開催の四国教区教師修養会に柏井伝道部長と共に出席，引続き九州福岡，熊本，鹿児島，宮崎別府，小倉諸教会を応援の上3月25日帰京の予定。<br>宮崎教会の献堂式に2月19日に出席。 |
| 4.29 | 基督教新報 | 2691 | 金沢に於ける日本宗教連盟主催第二回国民宗教大会に出席のため16日夜出発，19日朝帰京。 |
| 6.10 | 基督教新報 | 2697 | 5月3，4，5日の大阪教育協議会より9日兵庫教区，10日京都教区，11日東中国教区，岡山，島根，両県下諸教会応援，22日大阪梅花学院，23日同志社理事会に出席。6月10日仙台東3番丁教会献堂式11日の朝同教会，同夕刻大河原教会応援。 |
| 7.8 | 基督教新報 | 2701 | 7月1日夜堺川尻教会，20日朝大阪教会午後島之内教会献堂式，同夜講演会，3日午前大阪教職会，4日より6日湘南金沢文庫教区総会議長会議に出席。 |
| 1951. 1.27<br>(S26) | 基督教新報 | 2729 | 1月10日から17日まで兵庫県，和歌山県の農村諸教会を巡回伝道。 |
| 4.7 | 基督教新報 | 2739 | 4月1日関東教区総会のため渋川教会へ，同日夜島村教会へ，3，4，5日新中国教区総会のため，宮島と広島へ，12日，13日京都教区総会のため京都へ，25日，26日両日東北教区総会のため東三番丁教会へ出張， |
| 4.14 | 基督教新報 | 2740 | 4月3日広島において開かれた中国教区総会に出席，「霊魂に対する熱愛」と題して説教。<br>その前に宮島において開かれた信徒修養会で「日本基督教団の現代的使命」と題して講演。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 6.30 | 基督教新報 | 2751 | 教団成立記念講演を次の如くなす。6月19,20日大阪教区主催（大阪女学院にて），24日午前，霊南坂教会，夕，洗足教会，25日関東教区主催信徒大会（越ケ谷教会にて）27日茨城信徒大会（水戸にて） |
| 8.11 | 基督教新報 | 2757 | スイスに開催の世界教会協議中央委員会の出発に先だち次のように発表した。<br>友井総主事の病気静養中，丹羽巌主事を総主事代理とし，柏井光蔵，平賀徳造の両氏を顧問とする。 |
| 9.22 | 基督教新報 | 2763 | 7月28日欧洲へ旅立ち，全てのプログラムを完了して，9月25日夜半零時，羽田空港へ安着。 |
| 11.24 | 基督教新報 | 2772 | 11月26日～12月5日奥羽教区諸教会を問安。 |
| 1952.3.8<br>（S27） | 基督教新報 | 2786 | 3月23日から4月6日までコロラド州スプリングスで開かれる北米メソジスト教会海外伝道大会，4月23日から5月8日までサンフランシスコで開かれる北米メソジスト総会に出席のため3月18日午後2時，羽田空港を出発の予定。 |
| 5.31 | 基督教新報 | 2798 | 5月22日午後1時半羽田空港へ帰国。 |
| 9.13 | 基督教新報 | 2813 | 9月5日～14日栃木県下巡回。 |
| 11.1 | 基督教新報 | 2820 | 総会議長に四選される。 |
| 12.6 | 基督教新報 | 2825 | 11月26日静岡英和女学院65年記念式<br>29日大阪教区津田伝道所，阿部野教会<br>30日扇町，石橋，九条の三教会<br>12月1日大阪教区教師会，同教区信徒学校 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 2日京都府夜久野教会へ出張。 |
| 1953. 1. 3<br>(S28) | 基督教新報 | 2828 | 印度ラクナウに開かれる世界教会々議中央委員会に出席のため12月25日羽田空港出発1月27日頃帰国の予定。 |
| 5.16 | 基督教新報 | 2847 | 4月21日から東北教区総会に出席，宮城，東北両学院における仙台市連合集会で講演，続いて古川，石巻，常磐，三春，本宮，須賀川，白河の諸教会応援，5月2日帰京。<br>5月14日発，15日福岡市西日本新生館献堂式出席。福岡，長崎，佐賀，熊本，鹿児島，宮崎，大分，門司，諸教会を応援5月23日夜帰京の予定。 |
| 5.23 | 基督教新報 | 2848 | 6月5日より10日間，小崎議長ら沖縄出張予定。<br>かつて沖縄は九州教区に属していたが，終戦と共にかの地の教会はそれぞれ旧教派に返って現在に至った。今回教団から小崎議長，柏井副議長及び宣教師ストーン氏は6月5日から10日間沖縄を訪れることになった。日本基督教団はＩＢＣなる組織によって海外の教会と協力しているが，この経験をかの地の教会で語り，今後教団と沖縄の教会との連絡についても協議し，さらに各教会で伝道をなすのが今回の旅行の目的である。 |
| 10.31 | 基督教新報 | 2870 | 11月3日，静岡英和女学院講堂で開催される東海教区静岡県地区教職信徒総合修養会にて講演。 |
| 11.14 | 基督教新報 | 2872 | 10月31日静岡県富士地区（五教会）修養会。<br>11月1日浜松地区修養会（五教会）。<br>11月2日沼津・三島地区連合講演会（七教会）。<br>11月3日静岡英和女子校に終日開かれた　静岡県下修養会に講師として出張した。 |
| 11.21 | 基督教新報 | 2873 | 11月15日から九州地方へ，16日佐賀県武雄，17日佐賀，18日唐津，19日伊万里，20日有田，21，22日熊本草葉町，23日大牟田正山町，24日，25日北九州教職者会と信徒修養会，次いで京都の予定。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1954. 1.16<br>(S29) | 基督教新報 | 2880 | 1月9日(土)水戸市水戸新生教会の講演。<br>1月10日(日)下館教会創立記念礼拝に奉仕した。 |
| 4. 3 | 基督教新報 | 2891 | 3月2日から9日迄大阪教区内13教会に講演，3月20日から22日関東教区群馬県の三教会に講演，30日から4月2日迄，箱根の宣教師会議に出席，4月24日，25日は関東教区総会（於水戸）4月30日福岡市西日本新生会理事会に際し鹿児島市指宿，津久見の諸教会に講演5月4，5両日九州教区総会。5月11日大阪教区。12日兵庫教区。14日京都教区と以上五教区の総会に出席。 |
| 5.22 | 基督教新報 | 2898 | 夫人と共に5月18日夕，パン・アメリカン機でアメリカに向け出発，18日（ハワイ時間）夕ハワイに着。23日朝ロス，アンジェルス到着。ＡＢＣＦＭ年会（ニューヘーブン）エヴァンストン大会出席（ＷＣＣ第二回大会） |
| 11. 6 | 基督教新報 | 2922 | 新常議員（教職）に選ばれる（常任） |
| 1955. 1. 1<br>(S30) | 基督教新報 | 2929 | 1月20日刈谷教会，21日から1週間大阪市内の教会を応援する。 |
| 1.22 | 基督教新報 | 2932 | 1月21日より大阪教区内扇町，天満，島の内，西成，梅花，城北，高石，九条諸教会を応援。 |
| 7.16 | 基督教新報 | 2957 | 霊南坂教会は創立75周年の記念事業の1つとして小崎牧師に対する感謝を表するため赤坂榎坂五番地の70坪の敷地を卜して同地上に建坪20坪の牧師館を新築してこれを小崎牧師に贈呈した。牧師は去る7月7日新居に移転した。 |
| 11.26 | 基督教新報 | 2976 | 11月15日より20日まで次の如く関東教区内群馬県下諸教会の伝道を応援。<br>15日高崎南教会，16日安中教会，17日渋川教会，18日館林教会，19日太田八幡教会，20日桐生東教会。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1956. 5.26<br>(S31) | 基督教新報 | 3001 | 尼崎竹谷教会新会堂に於て，4月30日5月1日の2夜3回にわたり伝道応援。<br>市内各派教会より参加があり30数名の青年達が献身の決意をした由。うち1回は婦人矯風会の為の集会（65名） |
| 7.14 | 基督教新報 | 3008 | 日本キリスト教協議会議長として8月21日から9月7日までペンシルバニヤ州のランキャスターで開かれる福音改革派教会大会に招かれ，7月12日羽田を出発。尚，7月16日から18日迄ロンドンで開かれるＷＣＣＥ（世界キリスト教教育協議会）の実務委員会，及7月28日から8月5日迄ゼネバで開かれるＷＣＣの中央委員会にも出席。 |
| 11. 3 | 基督教新報 | 3024 | 第9回教団総会で，常任常議員となる。 |
| 12. 8 | 基督教新報 | 3029 | 第2回常任常議員会で，内外協力会代議員となる。 |
| 1958. 7.26<br>(S33) | 基督教新報 | 3112 | 7月15日～16日の臨時常議員会で「世界協会協議会（ＷＣＣ）と国際宣教協議会（ＩＭＣ）の合同試案研究に関する件」が上程され，丹羽総務局長から提案理由の説明があり，次の五氏に研究を委嘱することとなった。小崎道雄(委員長)，村田四郎，大村勇，Ｄ・ダウンズ，塚原要。 |
| 1960. 1.16<br>(S35) | 基督教新報 | 3187 | インドネシア内乱調停斡旋のため賀川豊彦氏は12月1日に和平アッピールをスカルノ大統領並びに革命政府首脳シャフルデン博士やインドネシア教会の指導者その他世界の代表的な政治家，宗教家たちに送り，世界の各方面に大きな反響を与えたが重い病床にある同氏は小崎道雄牧師に代理を委嘱した。 |
| 7. 2 | 基督教新報 | 3211 | 6月15日安保反対のための流血デモで，キリスト者の中から10数人の重軽傷者を出した事に対して，18日，有志10人（小崎道雄含）の会合が開かれ小倉警視総監にあてて，請願書を提出することになった。 |
| 9.17 | 基督教新報 | 3222 | 8月14日から24日まで英国セント・アンドリウス市の大学に開かれた世界教会協議会の中央 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 委員会に，教団代表として出席した。ＮＣＣ代表としては，武藤健氏が出席した。両氏は第二分団に出席し，<br>①戦争の原因となる人口と国土の問題。<br>②若い教会も徐々に海外伝道に協力しつつあること。<br>③教会の相互援助が日本に大なる証言となりつつあること。<br>などの三点を発言。<br>教団代表として８月２日より７日までデサイプルの世界大会に出席（エディンバラ市）。<br>全世界より2,500人の代表が集まり，７日まで熱心な証言がなされた。 |
| 1961. 3. 4<br>（S36） | 基督教新報 | 3245 | 夫人小崎静氏２月15日自宅で転倒。<br>頭部をうち３針ぬう裂傷をおい静養中。 |
| 4.22 | 基督教新報 | 3252 | 霊南坂教会を辞し，終身名誉牧師に就任。後任に飯清氏。 |
| 6. 3 | 基督教新報 | 3258 | 霊南坂教会で６月４日午後２時より，飯清氏の主任牧師，小崎道雄氏の名誉牧師，平松慶郎氏の伝道師の就任式が行なわれる。 |
| 8.26 | 基督教新報 | 3270 | 終戦記念日の８月15日，品川プリンスホテルでＮＣＣによる世界宗教者平和会議，原水爆禁止世界大会などに出席のため来日したソ連，中国，東独などの共産圏代表を歓迎しての午餐会がひらかれ，これに出席した。 |
| 12.16 | 基督教新報 | 3286 | ニューデリーのＷＣＣ第三回大会に出席後，白井，ジャーマニー，阿部氏とともに，マニラに寄る。９日にマニラの教会の代表者と協議会をもち，10日の主日には説教をする予定。また，マニラの総務局長のソプレピィナ氏の招待を受け，11日に香港を出て帰国の予定。（丹羽総務局長帰国談より） |
| 1962. 2.24<br>（S37） | 基督教新報 | 3295 | アジア基督教会館建設運動の発起人となる。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1962. 7.28<br>(S37) | 基督教新報 | 3317 | ロシア正教会の招きでモスクワを訪問。<br>7月30日，横浜出帆のソ連汽船で令息忠雄氏（名古屋キリスト教社会館長）を同伴して出発，ソ連の宗教事情を視察して8月帰国予定。 |
| 9. 1 | 基督教新報 | 3322 | 8月23日，3週間のロシア教会訪問の旅をおえて帰国。ロシア正教会から同国宗教最高勲章を受けた。 |

# 小崎道雄　論文　説教　一覧

(1946～1962)

| 年月日 | 雑誌名 | 号数 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1946. 6.20<br>(S21) | 教団新報 | 2550 | 「伝道の教団」 |
| 7.10<br>20 | 教団新報<br>教団新報 | 2552<br>2553 | 「神の能力」 |
| 8. 1<br>10 | 教団新報<br>教団新報 | 2554<br>2555 | 日本基督教団主催　基督者代議士礼拝。<br>小崎教団主管者説教。 |
| 11. 1 | 教団新報 | 2563 | 「懼るな小さき群よ」第4回教団総会に於ける説教。 |
| 1947. 2. 1<br>(S22) | 教団新報 | 2572 | 「新日本建設の基礎条件」<br>去る14日越ケ谷教会に於ける農村伝道協議会開会の説教。 |
| 2.10 | 教団新報 | 2573 | 「全国民覚醒のために奮起せよ」新年メッセージ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 3.20 | 教団新報 | 2577 | 「無牧の羊に対する責任」<br>去る5日常議員会に於ける説教。 |
| 12. 1 | 教団新報 | 2602 | 「世に勝つ信仰」<br>去る25日，日本基督教団常議員会の開会説教。 |
| 12.10<br>20 | 教団新報<br>教団新報 | 2603<br>2604 | 「ルーテル教会脱離」小崎総会議長談。 |
| 1948. 3.20<br>(S23) | 教団新報 | 2613 | 「信仰の祈祷」<br>3月16日，江ノ島岩本楼に於ける常議会開会説教。 |
| 11. 1 | 教団新報 | 2633 | アムステルダム世界教会会議報告。 |
| 11.10 | 教団新報 | 2634 | 「地の極まで　我が　証人とならん」<br>10月27日，教団総会開会説教大意。 |
| 12. 1 | 教団新報 | 2636 | 「世界会議の設定」世界教会々議にて |
| 1949. 1. 1<br>(S24) | 教団新報 | 2639 | 「新年を迎へ伝道の決意を新たにせん」<br>新年度メッセージ |
| 1.20 | 教団新報 | 2641 | 「婦人と伝道」 |
| 2.10 | 教団新報 | 2643 | 総会議長メッセージ |
| 3.10 | 教団新報 | 2645 | 「福音勝利の確信」<br>去る17日，教区長，伝道部長会議に於ける小崎総会議長の説教。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 5．1 | 基督教新報 | 2651 | 「五カ年伝道は，教会の建設」 |
| 7．5 | 基督教新報 | 2657 | 「十字架の宗教」<br>田浦に於ける婦人部長会議の特別講演。 |
| 8．1 | 基督教新報 | 2660 | 「小崎通信」ＤＤ学位受領，国際会衆教会々議，世界教会々議，英皇帝皇后拝謁記。<br>7月4日，オックスフォードにて |
| 9.20 | 基督教新報 | 2665 | 世界の教会は教団の完成を期待<br>今夏7月英京ロンドンに於て開催された世界教会々議中央委員会に出席後，4ケ月の欧米の旅を終えて，9月12日帰国，その後の教団議長室での記者との一問一答。 |
| 10.20 | 基督教新報 | 2668 | 「新教宣教90年記念大会式辞」<br>全国教師大会に引続き7日午後一時半から日比谷公会堂に於いておこなわれた新教宣教90年記念大会での式辞。 |
| 12.25 | 基督教新報 | 号外 | 「クリスマスの感激」 |
| 1950．1．7<br>（S25） | 基督教新報 | 2675 | 「牧会伝道に邁進せん」年頭のメッセージ |
| 4．8 | 基督教新報 | 2688 | 「信徒の伝道活動に期待」 |
| 4.29 | 基督教新報 | 2691 | 「時の兆」 |
| 9.16 | 基督教新報 | 2711 | 「謙遜　平和　感謝」<br>箱根修養会奨励要旨。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 11. 4 | 基督教新報 | 2717 | 「伝道の喜びと使命」<br>教団総会における開会説教。 |
| 1951. 1. 6<br>(S26) | 基督教新報 | 2726 | 「1951年への覚悟」 |
| 2.10 | 基督教新報 | 2731 | 北海道から帰京の小崎総会議長談。 |
| 6.23 | 基督教新報 | 2750 | 「日本基督教団成立10年に際して」 |
| 9. 1 | 基督教新報 | 2760 | 「世界教会会議中央委員会に臨んで」 |
| 9.22 | 基督教新報 | 2763 | 小崎議長帰国第一声。 |
| 9.29 | 基督教新報 | 2764 | 小崎議長の談話。 |
| 1952. 1. 5<br>(S27) | 基督教新報 | 2777 | 「1952年に望む」一大信仰の復興を |
| 4.12 | 基督教新報 | 2791 | ウェーキ島に24時間　渡米第１信<br>３月20日ホノルル前田牧師宅にて。 |
| 4.26 | 基督教新報 | 2793 | メソジスト教会海外伝道方策委員会に出席<br>渡米第二信　デントホテルにて |
| 5.17 | 基督教新報 | 2796 | デンバー，シカゴ歴訪　渡米第三信<br>４月25日，桑港にて。 |
| 5.31 | 基督教新報 | 2798 | 「キリスト教化のために」帰国談 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | メソジスト教会　総会の印象　会議を終りサンフランシスコにて。 |
| 10.25 | 基督教新報 | 2819 | 「新天新地の信仰」<br>10月21日第7回教団総会開会礼拝奨励の大要。 |
| 1953. 1. 3<br>(S28) | 基督教新報 | 2828 | 「1953年を迎う」 |
| 1.31 | 基督教新報 | 2832 | 「ラクナウ（インド）通信」 |
| 2.14 | 基督教新報 | 2834 | 「インドの印象」帰国談 |
| 4. 4 | 基督教新報 | 2841 | 「活けるキリスト」論説 |
| 5.23 | 基督教新報 | 2848 | ユース・フォア・クライスト運動――小崎議長は語る。 |
| 6.20 | 基督教新報 | 2852 | 「教団は成長する」創立13年を始むるに当りて。 |
| 7.18 | 基督教新報 | 2856 | 「国際問題と教団の使命」 |
| 10. 3 | 基督教新報 | 2866 | 「全国宣教会議の目的」基本主題講演。 |
| 11.14 | 基督教新報 | 2872 | 太平洋戦争中の日本の教会がとった態度についてのアンケートに答える。 |
| 1954. 1. 2<br>(S29) | 基督教新報 | 2878 | 「新しき年と教団の使命」論説 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 5.22 | 基督教新報 | 2898 | 第二回世界教会大会の問題。 |
| 6.26 | 基督教新報 | 2903 | 小崎議長よりの通信。 |
| 9.4 | 基督教新報 | 2913 | 小崎議長から(一)——エヴァンストンにて。 |
| 10.17 | 基督教新報 | 2919 | 世界教会々議でわれらは何をしたか　代員の報告。 |
| 11.13 | 基督教新報 | 2923 | 李徳全女史と懇談。 |
| 1955.11.5<br>(S30) | 基督教新報 | 2973 | 「牧会の立場からみた教会形成」<br>私の証詞 |
| 1956.9.1<br>(S31) | 基督教新報 | 3015 | 海外通信　小崎道雄 |
| 11.24 | 基督教新報 | 3027 | 訪問記⑬ＮＣＣ総会議長　小崎道雄氏 |
| 1958.2.1<br>(S33) | 基督教新報 | 3087 | 「十字架福音の宣教者　木村清松牧師」 |
| 8.16 | 基督教新報 | 3115 | 「世界平和の実現を」世界大会開会式式辞 |
| 1961.10.21<br>(S36) | 基督教新報 | 3278 | 教団創立20周年　記念座談会（その１）<br>創立当時の先輩に聞く　出席者　小崎道雄，阿部義宗，真鍋頼一，村田四郎 |
| 1962.1.13<br>(S13) | 基督教新報 | 3289 | 「キリストこそ」ＷＣＣ第三回大会から帰って報告講演要旨 |